

# いのちと地域を守る

### 考える

夏の子どもの体験学習として、学校や地域で「防災キャンプ」を開く動きが広がっている。体育館などに泊まる避難生活の訓練を中心に、学校周辺を探索して危険箇所を確認したり非常食作りにも取り組んだり。東日本大震災を教訓に、楽しみながら防災力を身に付ける狙いがある。

(菊池香子)

## 学校に宿泊避難生活体験

「床が固いから、段ボールを重ねて敷いてみよう。風が通るように窓を開けてみる。」  
7月23日夜、仙台市青葉区の新築小体育館。子どもたちがアイディアを出し合い、自分たちが寝泊まりする段ボールハウスを築いていく。カッターを使う工程は大人に協力してもらい、共同作業を進める。  
子どもたちの災害対応力を育てようと、PTAの「お父さん委員会」がアドベンチャーキャンプと銘打って企画した活動だ。震災で多くの親子が避難所生活を経験したことに基づいて、2013年から希望者を対象に毎年開催。今年は今見ると3分の1に当たる約250人が参加した。  
1泊2日の日程で、学年の枠を超えて編成した班ごとに行動した。日本損害保険協会(東京)と協力し、学区内を歩き、道路の危険箇所や消火栓など防災設備の場所をチェックする「ぼうさい探検隊」にも取り組んだ。  
PTAのスタッフが大鍋で温めたレトルトのご飯とカレー

## ■夏休みの「防災キャンプ」導入広がる

「夕食を食べた後、段ボールハウスで就寝。翌朝の解散まで「避難生活」を体験した。会代表の千葉佳和さん(38)は「大勢が泊まるって、広い体育館はちょっと狭い。狭い所を行動するのは大変」。6年になり、率先して行動できるようになるのが楽しみだ。4年松木美穂さん(9)は「みんなが頑張るのを見て、私も頑張りたい。関係性をつくることも大切。床は固くてあまり寝られない。」と語った。

## 楽しみながら学習



工直しながら段ボールハウスを組み立てる子どもたち。仙台市青葉区の東小。

## PTA、行政、住民団体など企画 共助の力高める効果も



宮城県仙台市青葉区にある東小で、防災キャンプ。児童は消防員の手で、ロープを使った移動訓練に挑戦した。

災害に備えた子どもたちの行動力を育む防災キャンプは、東日本大震災後、東北各地で開かれてきた。PTAのほか、行政や住民団体が中心となり、防災に詳しいNPO法人との連携で企画したりするケースもある。専門家は「多様な主体が関わることで地域の防災力が向上する」と期待する。

仙台市東区長命ヶ丘小では、地元住民が主体となった動きも広がっている。仙台市東区長命ヶ丘小では、地元住民が主体となった動きも広がっている。仙台市東区長命ヶ丘小では、地元住民が主体となった動きも広がっている。

### 伝える

2011.3.11

東日本大震災当時、宮城県山元町の花釜地区で町内会の班長をしていた山路とし子さん(72)は、地震後に避難を呼び掛けていた津波にのまれた。首まで水に漬かりながらも助ましの声に勇気づけられ、生還した。



山路とし子さん

## ■避難呼び掛け波にのまれる (宮城県山元町)



腰を抜かすほどの揺れで、津波の波が押し寄せた。津波警報が風に見えなかった。津波警報が風に見えなかった。津波警報が風に見えなかった。

## 還生受け声の励まし



がれきももれたJR常磐線山元駅。山路としさんの家も津波にのまれた。2011年3月、宮城県山元町山元町北新地。震災1から。

生まれは山元で、地理は頭に入っています。常磐線の西に逃げれば助かる、その思いがありました。夫も、海の近くで働く娘も流されてしまったら、私もこのまま死ねた。意識が薄れたそのとき、声がかえりました。「ほら、大きな波が来たよ、しっかりとつかまって」。近づくペラペラと女性が助ましてくれています。そう、ここで死んではいられない。夫と娘を探しにいかなければ。力を振り絞りました。流れてきた橋を何度も打ち付けてガラスを破り、見知らぬ家の2階に入りました。「お借りしますね」。震える体をタオルケットで包み込んだ。長く冷たい夜でした。

## 学校防災「将来の被災地」では 実情に即し対策着々

山形県は1960年代の新潟地震(64年)、羽越豪雨災害(67年)以来、半世紀近く大規模な自然災害を経験していない。2011年の東日本大震災でも、隣接する宮城県や福島県と対照的に被害は軽微だった。だからといって「山形には災害がない」というのはもちろん間違いで、県内各地に災害のリスクがある。

### 探る

山形大大学院教育実践研究科教授 村山良之さん



村山良之さん(52)は、東北大学大学院教育学研究科教授。東北大学大学院教育学研究科教授。東北大学大学院教育学研究科教授。

課題が、14年度から防災の要素を加えた。年度初めに通学車で一斉下校する日を設け、プッシュボタンや側面など注意すべき場所を地図で確認しながら歩く。上級生が下級生の放課後や校舎の鍵、備品に教えることも、子どもたちの防災意識を育てるポイントだ。

### 傍観者ではなく担い手に

大船渡市日頃市中副校長 鎌田慎さん(52) 7月下旬、全校生徒が体育館で泊まる訓練を初めて実施し、空き缶でランプを作ったり、避難所運営を学んだりしました。学区は東日本大震災で被災せ



地域を歩いて防災マップも作製しました。今後、住民から過去の災害を聞き取って内容を追加し、デジタル化して広く見られるようにしたい。高齢化が進む中、生徒には傍観者ではなく、地域防災の担い手になってほしいと思います。

### 現場から

### 避難訓練で迅速な対応を

仙台ターミナルビル総務部危機管理室調査役 庄子富夫さん(61) ホテルメトロポリタン仙台(仙台市青葉区)やエスパル仙台(同)などの防災訓練の指導や設備点検などを一括して担当



しています。今年4月には、JR仙台駅とエスパル東館で従業員ら計約150人が参加して避難訓練しました。仙台駅周辺は人通りが増えており、災害時の迅速な対応が求められています。東日本大震災後は、仙台市とJR東日本など17団体でつくる「仙台駅周辺帰宅困難者対策連絡協議会」に加盟し、帰宅困難者を一時避難させる訓練を年1回実施しています。大規模な避難は自治体や警察、企業との連携が大切だと感じます。